

東洋大学学術情報リポジトリ Toyo University Repository for Academic Resources

都市行政上における賤民集落の存在形態--江戸・弾左衛門囲内の近代町制化する場合

著者	荒井 貢次郎
雑誌名	東洋法学
巻	4
号	2
ページ	191-206
発行年	1961-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00007799/

都市行政上における賤民集落の存在形態

——江戸・弾左衛門囲内の近代町制化する場合——

荒井貢次郎

一、はしがき

二、弾一党集落の都市遠心移動

三、亀岡町（旧新町）の近世町制から近代市区制編入過程

四、新町、亀岡町、今戸町人口動態

五、新町固有産業の近代化

六、むすび

一、はしがき

関八州とその周辺の甲斐国、伊豆国等および東北地方に広く分布する賤民のうちにあって、その支配者として長く君臨した長吏（穢多）頭弾左衛門は、特別の行政機関である弾左衛門役所を設置し、伝承にいうところの鎌倉時代以

都市行政上における賤民集落の存在形態

来の連綿として栄えてきた一系の賤系を続けているこの階層中の名門の主であった(1)。

特に、江戸時代に弾左衛門は、幕府から浅草に俗称「新町^{しんまち}」という特別な地域を江戸町制の町割の際に割当てられ一般の士民とは別な雰囲気醸成していったのである(2)。もちろん、ここまでに至る過程で、その囲内はもと江戸城に近い日本橋室町にあったが、町制上、次第に浅草鳥越町へと江戸の町々の周辺に向って順次押し出されていったことの意味を知るべきであろう。

こうして、封建社会における基底層に対し、封建的支配層は、それに基底層であるということ为前提として特権と専門職を与え、且つ、特定の地域に住居地を指定してきたのである。そして囲内を本拠として、弾左衛門はその一党を引きつれて独自の活動を展開し、時には侵害を受けそうになった特権を保持することに努めてきたのである。というのは、例えば、賤民支配をめぐる非人その他の賤民系職種の人々からの反抗と反撃とに曝されつつも、よくその地位を確保し、警察的、行政的、経済的手腕を発揮してきたのである。

かくて、いふなれば日本における賤民名門中の名門である弾家とその一門一党の小規模な居城ともいふべき弾左衛門屋敷のある囲内が、封建社会内にあってその発展をつくり出し、そして近代町制化への狂瀾怒濤のうちに(3)、ついに日本賤民史上稀に見る典型的(?)な部落分解が行われた一つの事実を示し、これらの地は、現在、政府が同和事業施策の枠から外した地域となっている。本稿は、こうした江戸時代の「新町」を中心に取扱うことを意図するものである。

二、弾一党集落の都市遠心移動

浅草の穢多頭彈左衛門屋敷跡は、現在、東京都台東区浅草吉野町一丁目十二番地にある東京都立台東商業高等学校々地の辺（^④）と推定されているが、とにかく、この辺以東一帯が、もと亀岡町集落の心臓部であった。そしてその傍に山谷堀が走っている。この堀川の左堤が「土手」（日本堤）で、これに沿って、チヨキ舟で溯っていくと新吉原に行ける。しかし、それ以前における弾の屋敷所在地の変遷を先きに追求してみよう。

享保四年（一七一九）、彈左衛門由緒書（^⑤）に、

一、私先祖撰津国池田（^⑥）より相州鎌倉に下り相勤、長吏已下のもの強勢たりといへども、私先祖に支配被為仰付候。

とあるように、鎌倉に來住した弾は、源頼朝に仕官した。そのとき、弾は長吏以下の諸賤民座を支配すべき権限が許され、その旨を証する文書を下附されたが、この文書は、鎌倉若宮八幡に奉納してしまったと伝承してきた。その写本が現在各種残存している（^⑦）（^⑧）。

鎌倉から江戸へ移住した年は、明確にされていないが、少なくとも、天正十八年（一五九〇）に、徳川家康が江戸に入国したときには、江戸から府中（現在の東京都府中市）にまで出向いて、家康一行を出迎えている（^⑨）。

この入国以前は、江戸日本橋室町（^{むろまち}）に住居をかまえていた。その地には二、三抱えもある大樹が繁茂していて、弾一党が集落を形成していた（^⑩）。この地域は、現在の中央区本石町（^{ほんごくちやう}）、つまり、日本銀行、三井銀行、三越などのビルが

建っているところで、むかし、平川ひらかわの左岸、豊島郡の側にあった。「谷ノ原はの」と唱え、弾左衛門の木戸内になっていたので、この囲内は別天地を構成していた。この辺に架る常盤橋とまわは、もと「大橋おおはし」といったが、太田道灌時代には、「高橋たかはし」とよばれ、諸国の船が幅轆し、殷賑を極めた（11）。

日本橋の地から弾は、さらに集落民を引率して転じたのが、鳥越とりごえ（現在、台東区浅草鳥越一、二丁目）の地である（12）^{（13）}（14）。鳥越町に刑場がおかれ（15）弾配下が公役した。

この鳥越町は、むかし、峽田領はけたに属し、広い大な丘越地であったので、鳥越八か町の浮島といわれ、東は隅田川すみ（角田川）に近接し、南は神田川にのぞみ、西部一帯が、下谷の低地に続き、大雨のときは、四囲の池沼の水が溢れ出る。が、この鳥越だけは独立して丘阜となっていた。鳥越神社を中心にした集落が、ここに発展をしていた。元和六年（一六二〇）になると、幕府は、この丘陵を崩し、平らな地とした。そこで商家が営まれ、市街地の形態が整えられるように至った。さらに同八年（一六二二）、幕臣の受領地となったとき鳥越村が鳥越町と改称された。

正保二年（一六四五）再び幕府はこの地にある残存丘陵を取崩させ、平坦地とし、鳥越社地を除いて、外は公用地として弾から取り上げ、支配下の集落民は挙げて浅草山谷村に移転を命じた（16）。新しく移住した代地の山谷村における新居住地は、「新鳥越町しんとりごえ」（または新町しんまちと称する）といわれ、それに対して鳥越町を「元鳥越町もととりごえ」といわれるようになった（17）。

新鳥越町すなわち新町（俗称）は、今戸町いまどの西の方山谷堀さんやぼりの北にあり、穢多頭弾左衛門の配下の集団をもって新しく町造りが行われたものである。そして厳重な近世封建身分法によって束縛されつつ一曲輪を形成し、明治四年（一

八七一)の解放令が発せられるまで、その社会層が集团的に居住してきた。その後、明治、大正、昭和の諸時期を経ていくうちに、弾支配下であった人々は、生活の上昇と下降のいずれかのカーブをそれぞれ描きつつ、他の地域へと浸透していった。そして最早、その前身さえも不明となった多くの人々がいる。だが依然として、他の未解放部落に入り込んでいたり、スラムに転落している場合もある。

要するに、日本橋室町から鳥越町、さらに転じて新町へと、弾の集落が移転していく経路をたどってみると、それは、常に江戸市街地の繁栄に伴う膨張と共に、賤民集落であるために、支配層の権力により次第に都市の周辺へと強制立退を命令されている。こうして奥州街道に沿って押し流されていく現象は、あたかも、都市スラムがその周辺へと移行させられるという近代都市社会生成における一般法則と軌を一つにしている。

三、亀岡町(旧新町)の近世町制から近代市区制編入過程

浅草弾左衛門(後に弾内記といい、さらに弾直樹と改名する)の罫内(構内)につき享保十七年(一七三〇)、寛保元年(一七四一)、文政元年(一八一八)、万延元年(一八六〇)、慶応二年(一八六六)、明治六年(一八七三)、大正三年(一九一四)にわたる各時期の町名などを表で示しておく(第一表)。

明治四年(一八七一)八月に、新町は浅草区あさくさくに編入され、これを契機に町名が改められ「亀岡町」かめおかちょうとなり、同六年(一八七三)八月、一町であったのを三つの丁目に分割し、一、二、三丁目となる(註)。ここに亀岡という名を冠したのは、弾左衛門家系は、鎌倉将軍と関係があるのを誇りとし、これにちなんで、源家の氏神、鎌倉鶴ヶ岡八幡の祭神

町名沿革表 (18)

明治 2 年		明治 6 年 (浅草東町まで 第 5 大区)		大正 3 年
番組・年寄	町 名	小区・戸長・年寄	町 名	町 名
	長吏弾内記 構内 (19)	三小区 戸長 中村介吉 関輪定吉 年寄 佐久間治兵衛	亀 陶 町 1 丁 目	"
	長吏弾内記 構内		同 2 丁 目	"
	長吏弾内記 構内		同 3 丁 目	"

の分霊をこの地に勧請し、弾邸内の屋敷神稻荷明神社に合祠し、鶴に対して目出度い亀をとり、亀か岡八幡と私かに称していた(弾左衛門由緒書)。この亀か岡八幡から亀岡町かめおかちょうの名が起ったと伝承する。

囲内は、南北三町、東西一町あったと「遊曆雜記」は誌している。南は堀の方に従来の門を設け、北は今戸の通りに門があって、南北へ通り抜ける道が走っていた。

大正三年(一九一四)の記録(2)によると、各丁目の面積は、二、七九八坪(二丁目)、四、九〇九坪(二丁目)、四、四六七坪(三丁目)合計一二、一七四坪とある。さらに、昭和七年四月に区域改正が行われ、亀岡町一、二、三丁目が、今戸一、二、三丁目にそれぞれ吸収されていった。これを表で示そう(第2表)。

江戸時代の新町が近代都市制化される過程をみると、近世では穢多町として江戸町奉行の管轄下に弾左衛門を名主格として町を掌理させていった。しかし弾は、さらにこれより大きな役目があった。それは関八州などの賤民を支配する穢多頭という司法・行政にわたる重要な役職に任じられていった(23)。

第1表 亀岡町(旧新町)

享保17年	寛保1年	文政1年	万延1年	慶応2年
町名	町名	町名	町名	町名
長吏弾左衛門構内 天正中より	〃	〃	〃	〃
長吏弾左衛門構内 天正中より	〃	〃	〃	〃
長吏弾左衛門構内 天正中より	〃	〃	〃	〃

第2表 亀岡町の区域・町名改正変更対照表 (20)

(昭和7年4月1日改正)

改正前	改正後
<p>●●●●● 亀岡町一丁目の東一部 ●●●●● 同町二丁目の大部 ●●●●● 今戸町の南一部 ●●●●● 山谷町の一部</p>	今戸一丁目
<p>●●●●● 亀岡町二、三丁目の一部 ●●●●● 今戸町の一部 ●●●●● 玉姫町の一部</p>	同二丁目
<p>●●●●● 亀岡町一、二丁目の一部 ●●●●● 同町三丁目の大部 ●●●●● 今戸町の一部 ●●●●● 橋場町の南一部 ●●●●● 吉野町の一部</p>	同三丁目

明治四年(一七二)に、明治政府は東京に六大区をおき、さらに各区を七〇小区に分け、この世話掛として大区に区長一人、戸長、副戸長を置いた(24)とき、亀岡町一、二、三丁目は浅草区第五大区、第三小区に編入された(25)。

四、新町、亀岡町、今戸町人口動態

寛政一二年（一八〇〇）八月、新町における戸数は、弾家の他に二三二戸あった（26）（27）が人口は明らかにされていない。

明治一六年（一八八三）に戸数四三五、人口一、三二三から昭和三年（一九二八）になって、戸数六二五、人口二、七〇二へと跳ね上っている（28）。が、江戸時代には間引きなどの人口増加抑制によって大きな変化はなかったのではあるまいか。ところが、明治四年に解放令が出ると共に、封建的身分の束縛は解かれ、「新平民」となって平民という一般の人々との交流が地域的に行われ、さらに経済力の発展は、人口増加を招来し、亀岡町も近代資本主義の発展と共に、人口の変化がもたらされた。従って表で示した戸数、人口は、必ずしも弾支配下の人々の末裔とだけは限らない。が、かなりの比重を占めていたことは、除籍簿により証明できる（29）。

明治一六年から昭和三年に至るまでの亀岡町の戸数および人口を次の第3表によって示そう。

大正一二年九月一日の午前一一時五八分関東大震災火災とその後昭和初頭の区画整理に伴い、下層民は、荒川・足立・葛飾・向島・本所・深川方面へと押し出され、分離した。大正十年と昭和三年における亀岡町の丁目別戸口比較を第4表で示してみよう（30）。

この表が明示するように、大震災火災を境にして、亀岡町の戸数、人口ともに減少しているのは、災害で死んだ数もあるにせよ、前述の事実が、各区役所、役場の戸籍、寄留簿を通じて浮び上がってくることから裏書されるよう。すな

第3表 亀岡町の戸数・人口

町 名	年 月 戸数・人口	明16 ・12	大 1 ・12	大 2 ・12	大 3 ・12	大 5 ・ 4	大 8 ・12	大10 ・12	昭 3 ・12
亀岡町 1丁目	戸 数	91	144	162	164	181	160	150	131
	人 口	355	583	633	662	750	609	632	549
同 2丁目	戸 数	179	269	288	285	285	285	332	266
	人 口	682	1,028	1,127	1,094	1,224	1,178	1,336	1,126
同 3丁目	戸 数	165	205	216	218	243	263	240	228
	人 口	276	823	843	849	885	1,068	1,068	1,027
計	戸 数	435	618	666	667	709	708	722	625
	人 口	1,313	2,434	2,603	2,605	2,859	2,855	3,054	2,702
資 料		浅草 区誌 (上)	浅草区 誌(上) 東京市 調査	東京 市調 査	東京 市調 査	東京 市調 査	東京 市調 査	東京 市調 査	浅草 区史 (中)

第4表 亀岡町丁目別戸口比較表

町 名	調 査 年 月	戸 数	人 口		
			男	女	計
亀 岡 町 1 丁 目	大 10・12	150	350	282	632
	昭 3・12	131	292	257	549
同 2 丁 目	大 10・12	332	733	603	1,336
	昭 3・12	266	604	522	1,126
同 3 丁 目	大 10・12	240	587	499	1,086
	昭 3・12	228	538	489	1,027
合 計	大 10・12	722	1,670	1,384	3,054
	昭 3・12	625	1,434	1,268	2,702

わち、戸数九七、人口三五二の減少となる。

五、新町固有産業の近代化

弾囲内の新町の大多数の家は、革屋であつたと思われる。享和三年（一八〇三）、新町住民の職業は、主として牛馬の皮細工、絆綱、太鼓、雪踏、神輿などを製造し、幕府へも上納した（31）。特に、皮細工は、弾配下の生活をささえる代表的な特権固有産業といえる。

囲内については、十方庵の語るところでは、新吉原の曲輪のように、総門を構え、全く外部と一線を画し、内部は厳然と配下の商家が軒を並べ、皮革業を営んでいた。その囲内を貫く往来の両側には、さらに太物屋、質屋、湯屋、髪結などもあつた（32）。

さらに住民は、また竹皮笠、草履、同裏附、燈心、破魔弓箭などを製作する業務も行つた。これらの固有産業は、幕府の保護を受け、専売を許された。この特権に対し弾は、配下の穢多、非人たちを動員し、無宿、野非人の狩込、犯科人の護送、捕物、警固、刑の執行、仕置番役などの義務を負い、新町は役人町となつた。

新町が近世末まで、皮細工業の中心となつたのは、幕府が弾に対し関八州、甲斐、伊豆、陸奥、駿河などの十二か国における鑓牛馬取締の特権を許可していたからである。そこで、この地に皮問屋もあつた。かくて皮革業を支配し独占することによって、多大の利益を収めることができた。そこで、封鎖社会のため安価な労働力を一方的に集中でき、収奪できた産業構造は、トップ層にわすかばかりの数の富豪を形成させ、これに対し底辺では、極めて劣悪な多

くの貧困層を断えず再生産すべき状態を育成してきた。この環境のうちに、これらの階層の頂点に位した弾の財産は、三千石相当の身代へと築き上げられたのは江戸中期であった⁽³³⁾。

ところが、明治維新の政治変革を経て太政官から明治四年(一八七二)八月二八日発第六一号布告が次のように出されることにより弾左衛門が賤民層に君臨できた足元が、もうくも突き崩されていった。

穢多非人之称ヲ被廢候条、自今身分職業共平民同様タルヘキ事

この解放令は、果して封建的身分の制約に泣く、賤民集落に対する旱天に慈雨といえようか。差別意識は、昭和の現在にまで残存しているにかかわらず、職業の特権は剝奪されてしまった。職業の自由は、たしかに自由主義の原理に立つ資本主義成長期に突入するにはプラスになったであろうが、裏返せば未解放集落の固有産業の保護を外し、一般企業、投資家にその門戸を開いたこととなり、さらに、この業に旧武士群が転出し、また旧町人資本の投入が行われるようになった。

こうした外部からする圧力と、封建的製皮革技術の洋式化への変動期を巧みに乗り切るべき使命を担わされたのが、弾左衛門改めて弾内記から弾直樹に名をかえた運命の人であった。かくて、近代産業技術の怒濤に投げ込まれ、今までの伝統的皮革技術から脱皮し、洋式軍制による軍用皮革とその製品の生産に集落民の起死回生の突破口を目途した。しかし、これには、独占が伴わなかった。むしろ先覚者の試練のみが苛烈に弾に迫った。

内記は、洋式製革、製靴の重要性を早くも明治二年(一八六九)三月に着目し、元来皮革業を専門としてきた配下に、洋式製革法を伝習させて、技術的に世界的水準を追おうと図り、外国人教師を招聘し、雇上げて兵部省用達品の

調達を行うことにした。造兵司から明治二年九月付で弾内記宛皮革製造用達申付の辞令が交付され、会社組織による「皮革軍靴製造所」が設けられ、陸海軍造兵司所屬となった。弾の計画も順調に進んでいったところ、明治四年の解放令が出され、彈直樹以下穢多非人共民籍編入制が発せられた。これで、弾の支配職権は、東京府の命令で解除され皮革問屋の統制ができなくなり、洋式製造工場結社の監督権もなくなった。かくて滝野川（東京都北区）の製革製靴伝習所並に御用製造所を明治五年（一八七二）一月、浅草橋場町に移転し、武庫司から一〇年間の軍靴註文を受け、軍靴職工に対し、海陸刑律の拘束を適用し、弾はその事業を行ったが、職工たる伝習生が、主として貧困家庭の子弟で、給与費も多額にのぼったのに比較して、技能は向上せず、製品不合格と相まって軍靴は、軍当局で舶来品に切換え、輸入することが決定された。

しかし、再起を計った弾は、三井組の援助により、三井組監督北岡文兵衛の北岡の名を加え、この方面による資本の投入をえて、事業は彈北岡組となって、明治七年、軍靴製造所の業務を開始し、陸軍省御用を引受け、事業が進められたが、明治二十年に損失が発見され、また徴兵令改正で、大節約などあり、二一年収支償わず、ここに彈家伝来の不動産を投じて責に任じたが、同二年七月九日直樹は死去した。

その長子は、北岡と事業を続け、明治三五年、北岡に代り、賀田組と共同経営となって後に東京製皮株式会社となった（34）。

しかし、一般にいつて、日清、日露戦争とこの期における日本資本主義の前進は、皮革製品関係産業を發展させ、この産業に従事した人々にとって将来の發展を約束するものがあつた（35）。

こうした弾を中心とする皮革事業の展開に対し、履物業、花緒業も同じように亀岡町を中心として聖天町、馬道、山谷、花川戸、猿若町へと向って大きく発展していった⁽³⁶⁾。また神興神楽面太鼓業者もこの地を基地として発展を遂げている⁽³⁷⁾。

これらの皮革関係産業の集落的展開については別の機会に詳述したい。

六、むすび

皮革関係等固有産業の飛躍的發展と相まって、亀岡町住民はここを基地として資本の蓄積をした人々もかなりいるが、その反面大多数の人々は、明治三十一年に横山源之助が「日本の下層社会」で東京におけるスラムの様相を描いたうちに、亀岡町のスラム民化を簡単に指摘している。わたしは、すでに「江戸時代の賤民集落から近代スラムへの変容についての一考察」(一九五八年六月一日、日本社会福祉学会関東部会第五回研究大会報告)と題して、東京市下谷区万年町(近世の下谷山崎町、これは準賤民乞^{ごう}胸^{むね}頭の居住地)の例を引き論証し、さらに、昭和三四年度地方史研究者協議会大会で、亀岡町のスラム化を追求してみた。しかし、これらは別の機会ですらに詳しく論述してみたい。従ってここに印刷にする項目から省いた。

つまり、スラムは、資本主義発展のうちにはらむ矛盾によって生れたルンペン・プロレタリアートを最底とする細民集団であるとしても、それが、すべて資本主義とともに新たに転落した人々の群のみとは限られずに、近世賤民群の再編成群をも包摂し、いな、むしろ中核体となって雪ダルマ的にやはり遠心運動を行っていった。かくて、この社

会の片隅にきく、「俺たち貧乏人は、やっぱり何時になっても貧乏人に生れついていやあがる」という半ばあきらめの言葉が、今後其真理でないことを望んでやまない。

だが、もと亀岡町の地は、戦災を経て、ほとんどかつての面影はない。

註1 石井良助編「日本法制史」二五八—二六〇頁。

2 日本文科学会編「社会的緊張の研究」の中の『少数問題の問題』の章。

3 「西村勝三翁事歴」(東京常民史研究所蔵)。

4 弾屋敷の旧敷地に囲ぐらしてあった土塀と伝えられるものが、昭和一二、三年頃まで残っていた(筆者聞書、木村新之助談)。

5 拙稿「江戸時代における賤民支配の一考察」(『東洋法学』創刊号、二二六頁)。

6 現在の大阪府池田市にあたる(大阪府史料)。

7 「從 頼朝公長吏已下支配可仕旨御証文、鎌倉若宮八幡宮奉納之旨申候得共分明に無御座候(中略)別当之申達拔写真、別当の判形御座候得ば奉納と相聞申候云々」(『文化十二年(一八一五)九月、成稿「御府内備考」卷二〇』)。

8 前掲拙稿、二二一頁、註(10)。

9 「御府内備考」卷二〇(大日本地誌大系本、第一卷、三九六頁)。

10 「穢多頭団左衛門は、御入国前。今の本通り室町三四町の辻にあたり候に、代々居住仕候」(『事蹟合考』二)。また「只今日本橋尼店と申すあたり、茨原の中に地高なる所有りて、」「穢多村にて団左衛門が屋敷杯も有之」(『落穂集追加』二)とある(拙稿「弾左衛門由緒書について—所謂廿九座」中大評論、一九五〇・一、四四頁)。

11 「江亭記」。菊池山哉「日本の特殊部落」(東国之一)二二六頁。同、「五百年前の東京」第五章。

12 「御入国以後。只今の元鳥越と申す辺へ引き移り、」(『落穂集追加』二)。

13 「鳥越ノ穢多ハ、長吏弾左衛門ノ徒、其ノ頃鳥越ニ居リシモノアリ。今の猿屋町ヨリ向柳原ノ辺ハ、其旧迹ナルヨシ」(『天正日記』)。

- 14 「往古日本橋室町の辺に居住し、此の地に移り来る」(江戸砂子補)。
15 「慶長年中の頃迄は刑罪場云々」(「御府内備考」卷一八、前掲本、第一卷、三五四頁)。
16 「正保二酉年、当所最寄不残御用地に被召上、山谷村にて代地被下置、當時の新鳥越町に御座候。(中略)町銘の儀は鳥越村の旧地に付元鳥越町と相唱候由申伝に御座候。」(「御府内備考」卷一八、元鳥越の項―前掲本、同書、第一卷、三五二頁)。

17 「正保二年丘阜取崩しと共に、同年九月町屋を仰付けられた際は、単に鳥越町と呼んでいたが、元の字を冠するにいたったのは何年頃か不詳である。」(東京都台東区役所刊「台東区史」上巻、八二四頁)。

18 東京市浅草区役所版「浅草区誌」上巻(大正三年)四六七頁。「各町の沿革」により作成。

19 「浅草区誌」上巻、四六七頁に慶応二年に弾内記とあるが、弾左衛門が慶応四年(一八六八)正月、に身分を平人に引き立てられたとき、幕府当局に改名出願し、同月二十七日、町奉行から「左衛門改メ弾内記」と改名許可を受けている(高橋梵仙「部落解放と弾直樹の功業」二三頁)ことを正しいとすれば、二年は間違いとなろう。

20 東京都台東区役所刊「台東区史」上巻、九一三頁。

21 浅草区史編纂委員会「浅草区史」上巻、(「街衢篇七、昭和八年九月三日刊)八三頁。

22 「浅草区誌」上巻、五二八頁。

23 拙稿「大磯宿小頭助左衛門文書抄」(「東洋法学」第三卷第一号)一二一頁、註(5)。

24 磯村英一「区の研究」(昭和十一年)七頁。

25 亀岡町(旧新町)町名沿革表(別表(1))。

26 寛政十二年(一八〇〇)八月、弾左衛門が幕府に提出した報告書によると、戸数は次のとおりとなっている(南撰要集)。
一、貳百参拾貳軒

是者私囲内に罷在候手下ども家数に御座候

内

一 七軒

手代並書役之もの

一 六拾軒 役 人

一 百六拾五軒

平之もの

(三浦周行「法制史之研究」二六八―九頁)

27 拙稿「弾左衛門由緒書について」(中大評論・一九五〇・一) 四六頁。

28 「浅草区誌」上巻。「浅草区史」中巻。東京市役所商工及統計課、庶務課調査書など。

29 東京都台東区役所浅草支所戸籍課文書。戸籍課より所轄裁判所に提出した戸籍異動関係文書。

30 「浅草区史」行政篇(中) 二五二頁。東京市役所「東京市各区町別戸数及人口」(大正一〇・一二・三一生在、大正一一・一一・一刊) 五三頁。

31 享和三年(一八〇三)十二月、弾左衛門が幕府に差出した願書(幸田成友「弾左衛門の生計」(「日本経済史研究」収・六〇四頁)

32 三浦周行「法制史之研究」二七〇頁。

33 武陽隠士「世事見聞録」。東京皮革青年会、皮革産業沿革史編纂委員会「皮革産業沿革史」(上巻) 五九頁。

34 「部落解放と弾直樹の功業」三六―六三頁。「皮革産業沿革史」上巻。座談会記録。「日本皮革株式会社五十年史」。

35 東京靴同業組合「靴の発達と東京靴同業組合史」第一編、第三一八。

36 今西卯蔵「はきもの変遷史」(昭和二五年刊)。花緒製造は、明治以降特に盛んとなっている。

37 宮本卯之助開店(文久元年創業)、株式会社岡田屋(天保六年創業)、文南部屋五郎右衛門(元禄二年創業)の創業は自称にして、史料による裏付については筆者未調査。これらは代表的な神輿、太鼓屋である。